

香川県における水稲乳苗移植栽培に関する研究

第 1 報 育苗方法と苗質および機械移植精度との関係

藤田究・森芳史・片山哲治

水稲乳苗の育苗において、育苗日数や育苗培地を変えた場合の苗質および田植機による移植精度等について検討した。

1. 乳苗の地上部乾物重は、育苗日数が多いほど増加したが、胚乳残存率は低下した。また、乳苗は稚苗に比べて移植時の苗のハンドリング適性が劣り、活着率が低く、植付姿勢も劣ったが、育苗日数が多いほどこれらが向上する傾向があった。

2. 苗のハンドリングおよび移植精度から見ると、育苗日数は 7 日以上必要と考えられた。

3. 育苗培土の種類によって苗質に違いが認められたが、移植精度に大きな差は認められなかった。また、移植時の苗のハンドリング適性は、ロックウール系成型マットでは良かったが、粒状培土と水田土ではやや劣り、花崗土では劣った。

4. 粒状培土や水田土で育苗した乳苗は、田植機へ苗を乗せかえる際、慎重に扱う必要があるが、ほぼ現状の田植機で移植が可能と考えられた。

キーワード:育苗,育苗培地,移植精度,水稲,苗質,乳苗